

Title	方言習得に関する一考察 : 非関西圏出身大学生の京阪式アクセント習得をめぐる調査結果を基に
Author(s)	田村, 幸誠; 松浦, 幸祐
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2022, 2021, p. 29-38
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/88372
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

方言習得に関する一考察：
非関西圏出身大学生の京阪式アクセント習得をめぐる調査結果を基に

田村幸誠* 松浦幸祐**

1. はじめに

関西地域以外の出身者が関西の大学に入学してきて、最初に関西出身の学生に直される発音の一つが、ユニバ（ユニバーサル・スタジオ・ジャパン）であると関西地域以外の出身学生からよく聞かされる。自己紹介などでユニバをHLL（高低低）と発音した途端、関西出身の学生にユニバ（LHL）と自信を持って言い返されるのがお決まりらしい。一方で、そのような関西地域以外の出身学生も、関西で一年も生活すれば、自分の日本語が関西弁に影響されていると自覚を持つようになり、例えば、帰省した際に友人や家族との会話でつい関西アクセントが出てしまったり、アルバイト先での出来事を説明する時なども登場人物の直接話法の部分は関西弁にスイッチしてしまったりする。関西の大学で出くわすこのようなエピソードは大変微笑ましい。その一方で、少し失礼であるが、関西出身の筆者（田村）からすると、彼らが言うほどには彼らのアクセントは関西弁になりきっていないという印象も同時に受ける。

本論文の眼目は、大阪大学への入学に伴って関西（大阪）での生活を始め、(i) 関西（大阪）のアクセントには慣れて問題なく理解できる、(ii) 関西弁を話そうと思えばある程度話せる、と自負する関西地域以外の出身の大学生が、実際はどの程度関西アクセントを真似でき、習得できているのかに関して基礎的な調査を行うことにある。次節で本論文の背景と争点を提示する。まず、Shibatani (1990) に沿って方言習得の対象 (Dialect 2, (D2)) である京阪式アクセントの特徴を概観する（今回の調査は特に大阪大学の学生を調査対象としたので、以下、「大阪式アクセント」という用語を用い、「大阪式」と略す）。その上で、3節以降の調査とその考察すべきポイントを明確にするために、Kubozono (2018) の論考を概観する。Kubozono (2018) は、鹿児島県の若い世代に観察される、東京方言の影響によるアクセントの変化を扱ったものであるが、鹿児島県の若い世代のアクセント変化は、対応する東京方言の語（分節; *minor phonological phrase*）にアクセント核 (*accent kernel* (HL; ピッチの急激な下降)) が含まれるかどうかによって強く影響されることを報告している。続いて、3節で実際の調査方法とその結果を示した後、4節で東京式アクセント（以下、東京式）を Dialect 1 (D1) とする大学生が、大阪で D2 (大阪式) を真似て習得する際にも Kubozono (2018) の指摘と同じ現象が起きるかという観点を中心に分析を進める。そのことと併せて、恐らく大阪での大学生活を通じて初めて聞いたと考えられる、大阪大学内で使われるキャンパス言葉など (e.g. みのぱん (箕面キャンパスでの一般教養科目) ; 坂下 (豊中キャンパスの位置する待兼山を下りた箇所)) とそうでない語 (e.g. 阪神; 足切り; ニワトリ) の間で、方言習得の差が生じるか否かという問題、また、鹿児島地域のアクセント（以下、鹿児島式）を D1 とする大学生と比べて、大阪式のアクセント習得に差があるかなどの問題も考察する。5節は結語とする。

* 大阪大学 人文学研究科 言語文化学専攻; e-mail: tamura.yukishige.hmt@osaka-u.ac.jp

** 大阪大学 日本語日本文化教育センター; e-mail: matsura.kosuke.cjlc@osaka-u.ac.jp

結論の大きな部分を先に少しまとめると（用語等は次節で説明する）、(i) 音調パターン全体（e.g. サカシタ LLLH（坂下）；アシキリ LLHL（足切り）；ニワトリ HHHH（鶏）；セツ LLH（摂津）；オトコ HHL/HLL（男））を大阪式で発音できるかどうかに関しては、東京式の学生も鹿児島式の学生も、その復元率（正答率）は 50%に満たなかった。一方、(ii) 平板型（アクセント核なし）と起伏型（アクセント核あり）の差異を捉えられたかに焦点を絞ると、その復元率（正答率）は、東京式の学生も鹿児島式の学生も、80%を超えるものとなった。しかし、(iii) 大阪式の特徴である H 平板と L 平板という 2 つの平板型を適切に区別できた学生は今回の調査では見当たらず、東京式の学生であるか、（本来の方言環境に L 平板を持つ）鹿児島式の学生であるかに関わらず、大阪式の 2 つの平板型に対応する語をいずれも H 平板で発音する傾向が観察された。

2. 背景と争点

本節では、まず、方言習得の対象である大阪式アクセントの特徴を、Shibatani (1990) に沿って概観する。その上で、3 節以降の調査と分析における論点をより明確にするために、Kubozono (2018) の論考を紹介する。

東京式と比べて、大阪式の最も大きな特徴の一つとして、アクセント核を持たない平板 (unaccentuated) アクセントに、2 種類あることが挙げられる (Shibatani (1990:181–182))。例えば、東京式平板アクセントのサクラ LHH（桜）とウサギ LHH（兎）は、大阪式では、前者が HHH（サクラ-ガ HHH-H）、後者が LLH（ウサギ-ガ LLL-H）と区別して発音される。本稿では、前者を「H 平板」、後者を「L 平板」と呼んで区別することにする。東京式の平板アクセントは、H 平板の一種とみなすことができるが、東京式 H 平板が大阪式 H 平板と音調的に異なる点は、例えば、「桜が」の他にも、ウシ-ガ（牛が）において、大阪式が HH-H であるのに対して、東京式は LH-H となり、サカナ-ガ（魚が）では、大阪式が HHH-H であるのに対して、東京式は LHH-H となるというように、東京式では語頭のモーラが 1 つ下がった形で発音されることにある (Shibatani (1990:178–179)；金田一 (1975:57))。

このことと関連して、アクセント核がある語においても、東京式では HH あるいは LL で語の音調が始まるのが容認されないのに対して、大阪式では、アタマ（頭）やシズク（雫）に代表される HHL の発音や、カマキリ（螻蛄）やデッパ-ガ（出っ歯が）のような LLHL の発音も観察される (Shibatani (1990:159, 178–179)；服部 (1950:157–158)；平山 (1960)) という違いがある。

ここで、図 1 を見てみよう。日本語のアクセントの分布を理解する上で、最も興味深い点の一つが、本州において、関西地域（図では縦線で示され Kyōto-Ōsaka とラベル付けされた地域）を挟んで、両側（図では横線で示され Tōkyo とラベル付けされた地域）に、同じタイプのアクセント類型が観察されることにある (Shibatani (1990:190)；金田一 (1975: 3 章)；調査が進んだより精緻なアクセント類型とアクセント地図は Uwano (2012:1422, 1429) を参照されたい)。

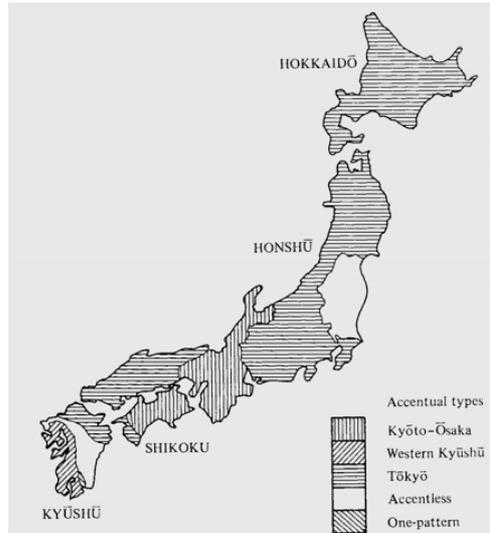


図1. 日本語のアクセント特徴と分布の鳥瞰図 (Shibatani 1990:211)

そして、このアクセント分布に関して、地勢的に関西地域だけを浮かび上がらせることに貢献する主な特徴こそが、先の段落で述べた、平板にH平板とL平板の2種類があること、そして、アクセント核がある語においても、HHやLLで語の音調を始められる点である (Shibatani (1990:190) 及び、金田一 (1950:51) にある各方言のアクセント対応表を参照されたい)。よって、大阪式をD2として方言習得する場合、取りも直さず、この2つの特徴にいかに対応するかが鍵となると考えられる。

さらに、図1において、鹿児島以西北の九州が斜線 (Western Kyūshū) で示されていることに注目されたい。この地域のアクセント (例えば、鹿児島式) の大きな特徴は、東京式と同じように平板アクセントは1つのタイプしかないのだが、それがL平板となる点である (Shibatani (1990:182–183))。したがって、鹿児島式では、大阪式でL平板の語 (e.g. ウサギ LLH; ウサギ-ガ LLL-H) と同様に、例えばキツネ (狐) であれば、キツネ LLH、キツネ-ガ LLL-H と発音される。加えて、起伏型の語においては、語の長さに関わらずアクセント核の位置が固定されるという特徴を示す。例えば、鹿児島式では、アメ HL (飴)、サカナ LHL (魚)、ケダモノ LLHL (獣) のように、後ろから2つ目の音節にアクセントが置かれる (Shibatani (1990: 183) ; 例は Kubozono (2012:1398) より引用。なお、伝統的に鹿児島式のL平板は Type B、起伏式は Type A と呼ばれて区別されている (平山 (1960) ; Kubozono (2012:1938) ; Western Kyūshū エリア内の地域差に関しては Uwano (2012) を参照))。L平板を持つという鹿児島式の特徴は、鹿児島式の話者が大阪式を D2 として習得する際に、L平板を元々持たない東京式の話者に比べて優位に働くか否かという点で、本稿にとって重要なポイントとなる。

続いて、Kubozono (2018) を概観する。Kubozono (2018) は、アクセントに関して、D1 が D2 から影響を受ける場合、D2 の対応する語が平板型か起伏型かが影響を与える最も主要なパラメータとして働くと主張するものである。この主張を端的に裏付けるものとして、ここでは表1を見られたい。

KJ \	TJ	'Accented' [+FALL]	'Unaccented' [-FALL]
Type A [+FALL] → [-FALL]		7%	43%
Type B [-FALL] → [+FALL]		25%	11%

表1. 鹿児島県の若い世代の基礎的な名詞に見られるアクセント変化
(Kubozono 2018:288 ; オリジナルは Kubozono 2007)

表1において、KJは鹿児島方言を、TJは東京方言を表す。また、Type Aは先の鹿児島式の起伏型を、Type Bは先のL平板を表す。この表が示しているのは、Type A（起伏型 [+FALL]）が平板型 [-FALL]に変化するの、東京方言（D2）の対応する語が平板（unaccented）である時の方が高く（7% vs. 43%）、また、Type B（平板型 [-FALL]）が起伏型 [+FALL]に変化するの、東京方言（D2）の対応する語が起伏型（accented）である時の方が高い（25% vs. 11%）ということである。D2の語の個別の音調パターン全体ではなく、あくまでその語にアクセント核があるか否かに反応していることが重要な点である。例えば、元の鹿児島式でL平板（Type B）の「アオシゴウ LLLH（青信号）」は、対応する東京式のLHHLLLという起伏型の発音が影響し、若者世代においてLLHLというアクセントへと変化するが、生じたLLHLはD1の鹿児島式で許されるアクセント核の付与であり（後ろから2つ目の音節にアクセント核が置かれる）、決して、LHLLやHLLL、あるいは、東京式そのままのLHHLLLなどにはならないことが報告されている（なお、モーラ方言とシラビーム方言の違いで知られているように、鹿児島式は東京式、大阪式とは異なりモーラではなく、音節がリズム単位（rhythmic unit）として機能する（Shibatani(1990:160); 柴田（1962））。東京式と鹿児島式とで、アオシゴウに対して付与されるLとHの数が異なっているのはそのためである）。

3. 調査と結果

では、調査の概要とその結果に移ろう。調査は、東京式話者10名と鹿児島式話者5名を対象に、Zoomを介してオンラインで行った（kagoshima4のみ対面式で行った）。参加者の決定にあたっては、両親のどちらかでも関西出身者が含まれる被験者や、大学入学以前に短期間でも関西に住んだことのある被験者は選定せず、大学生活で初めて関西弁のシャワーを浴びた被験者に限定した。調査は、一つ一つの語をスライド上に表示し、「関西弁で読んでください」と語りかける方式で行った。その際、「桜」のように、語を単独で読み上げてもらうだけでなく、「桜が咲く」などの文も読み上げてもらった。それぞれの語と文は2回ずつ読んでもらい、分析には1回目の発音のみを用いている。なお、このインタビュー調査は、大阪式の影響を避けるため、東京式話者である松浦が全て東京式で行った。

調査結果は下の表2、表3、表4に示される通りである。調査対象の語には、単純に高低をひっくり返すような答えを避けるため、3モーラ以上の語を選んだ。また、東京式の被験者に偶然、静岡出身者が5名いたため、東京式は首都圏（表2）と静岡（表3）で分けて示すことにした。表の縦列における「分類」とは、1は主に大阪大学のキャンパス語や、ごく近年に使われ出した若者言葉で、恐らく大学に入学するまで一度も聞いたことがないと考えられる語、3は日常語からランダムに選んだものである。2はその中間を意図している。表の「大阪式」とは、いわば「正解」であり、関西出身の阪大生4名の発音を元にしたものである。したがって、例えば「卒論（そつろん）」は、伝統的な大阪式ではLLLHとなるかもしれないが、関西出身の阪大生4名全員が

LHLL と答えたため、本稿での正解は起伏式の LHLL としてある。また、4名の発音が一致しない場合は、「みのぼん」の LHLL と LLLH のように、2つを正解の候補として残してある。表では、各被験者の「回答」に続いて、その正誤が示されている。まず、「音調」とは、被験者の回答が大阪式の音調パターンと完全に一致したかどうかを示している。また、「核有無」は、平板型・起伏型に関して正解したかどうかを、「核位置」は、起伏型において、HL の位置が大阪式 (D2) と一致したかどうかをそれぞれ示している。

例えば、shutoken1 の「起伏」の項目「言社 (げんしゃ、言語社会専攻の略)」を見てみよう (上から 10 個目)。この項目は、阪大内で使われる言葉なので分類は 1 であり、大阪出身の阪大生 4 名が全員 LHL と発音したため、「大阪式」には正解として LHL (起伏型) が示されている。これに対して、shutoken1 は「言社」を HHL と回答したので、「音調 (パターン)」は不正解、「核有無」は正解となっている。また、「核位置」は HL の位置が大阪式と同じなので正解である (LHL と HHL)。

首都圏	分類	大阪式	shutoken1				shutoken2				shutoken3				shutoken4				shutoken5						
			回答	音調	核有無	核位置	回答	音調	核有無	核位置	回答	音調	核有無	核位置	回答	音調	核有無	核位置	回答	音調	核有無	核位置			
L 平 板	1	バ先	LLH	LHH	誤	正	LHH	誤	正	LHH	誤	正	LHH	誤	正	LHH	誤	正	LHH	誤	正	LHH	誤	正	
		坂下	LLLH	LHHH	誤	正	LHHH	誤	正	LHHH	誤	正	LHLL	誤	誤	LHHH	誤	正	LHHH	誤	正	LHHH	誤	正	
	2	摂津	LLH	HLL	誤	誤	HLL	誤	誤	HLL	誤	誤	LLH	正	正	HLL	誤	誤	HLL	誤	誤	HLL	誤	誤	
		阪大	LLLH	HHHH	誤	正	HHHH	誤	正	HHHH	誤	正	HHHH	誤	正	HHHH	誤	正	HHHH	誤	正	HHHH	誤	正	
H 平 板	2	あかん	HHH	LHH	誤	正	LHH	誤	正	HHH	正	正	LHL	誤	誤	LHL	誤	誤	LHL	誤	誤	LHL	誤	誤	
		梅田	HHH	LHH	誤	正	HLL	誤	誤	LHH	誤	正	LHL	誤	誤	HLL	誤	誤	HLL	誤	誤	HLL	誤	誤	
	3	豊中	HHHH	LHHH	誤	正	LHHH	誤	正	LHHH	誤	正	HHHH	正	正	LHHH	誤	正	HHHH	正	正	LHHH	誤	正	
		タバコ	HHH	LHH	誤	正	LHH	誤	正	LHH	誤	正	HHH	正	正	LHH	誤	正	HHH	正	正	LHH	誤	正	
ニワトリ	HHHH	LHHH	誤	正	LHHH	誤	正	LHHH	誤	正	HHHH	誤	正	LHHH	誤	正	HHHH	誤	正	LHHH	誤	正			
起 伏	1	言社	LHL	HHL	誤	正	LHH	誤	誤	HLL	誤	正	HLL	誤	正	HHL	誤	正	HHL	誤	正	HHL	誤	正	
		再履	LHL	LHL	正	正	HLL	誤	正	LHH	誤	誤	LHH	誤	誤	HLL	誤	正	HLL	誤	正	HLL	誤	誤	
		バンキョー	LHLL	HLLL	誤	正	HLLL	誤	正	HLLL	誤	正	HLLL	誤	正	HLLL	誤	正	HLLL	誤	正	HLLL	誤	正	
		みのぼん	LHLL	LLLH	LHLL	正	正	LHLL	正	正	LHLL	正	正	LHLL	正	正	LHLL	正	正	LHLL	正	正	LHLL	正	正
	2	難波	HLL	LHL	誤	正	HLL	正	正	HLL	正	正	HLL	正	正	HLL	正	正	HLL	正	正	HLL	正	正	
		とりき	LHL	LHL	正	正	LHL	正	正	LHL	正	正	LHL	正	正	LHL	正	正	LHL	正	正	LHL	正	正	
		阪神	HLLL	HLLL	正	正	HLLL	正	正	HLLL	正	正	HLLL	正	正	HLLL	正	正	HLLL	正	正	HLLL	正	正	
		かまへん	HLLL	HLLL	正	正	HLLL	正	正	HLLH	誤	正	HLLH	誤	正	LHLL	誤	正	LHLL	誤	正	LHLL	誤	正	
		卒論	LHLL	LHLL	正	正	LHLL	正	正	LHLL	正	正	LHLL	正	正	LHHH	誤	誤	LHLL	正	正	LHLL	正	正	
		関電	LHLL	HHLH	誤	正	HLLH	誤	正	LHHH	誤	誤	LHHH	誤	誤	HHLH	誤	誤	HHLH	誤	誤	HHLH	誤	誤	
		あかんで	HHHL	LHLH	誤	正	LHLL	誤	正	LHLL	誤	正	LHLL	誤	正	LHLL	誤	正	LHLL	誤	正	LHLL	誤	正	
		足切り	LLHL	LHHH	誤	誤	LHHH	誤	誤	LHHH	誤	誤	LHHH	誤	誤	LHHH	誤	誤	LHHH	誤	誤	LHHH	誤	誤	
		座学	HLL	HLL	正	正	HLL	正	正	HLL	正	正	HLL	正	正	HLL	正	正	HLL	正	正	HLL	正	正	
		蛍	LHL	HLL	HLL	正	正	HLL	正	正	HLL	正	正	HLL	正	正	HLL	正	正	HLL	正	正	HLL	正	正
		男	HHL	HLL	LHH	誤	誤	HLL	正	正	LHH	誤	誤	HHH	誤	誤	HLL	正	正	HHH	誤	誤	HLL	正	正
		イチゴ	LHL	LHH	誤	誤	HLL	誤	正	LHL	正	正	LHH	誤	誤	HLL	誤	正	LHL	正	正	HLL	誤	正	
		魂	HLLL	HLLL	正	正	HLLL	正	正	HLLL	正	正	HLLL	正	正	HLLL	正	正	HLLL	正	正	HLLL	正	正	
		カマキリ	LLHL	HLLL	誤	正	LHHL	誤	正	HLLL	誤	正	HLLL	誤	正	HLLL	誤	正	HLLL	誤	正	HLLL	誤	正	
		雷	HHHL	LLLH	LHHH	誤	誤	LHLL	誤	正	LHHL	誤	正	LHHL	誤	正	LHHL	誤	正	LHHL	誤	正	LHHL	誤	正
		鈴虫	LHLL	LHHH	誤	誤	LHHL	誤	正	LHLL	正	正	LHLL	正	正	LHLL	正	正	LHLL	正	正	LHLL	正	正	
地下鉄	LHLL	LHLL	正	正	LHLL	正	正	LHLL	正	正	LHLL	正	正	LHHH	誤	誤	LHLL	正	正	LHLL	正	正			

表 2. 首都圏出身者を対象とした調査の結果

静岡	分類	大阪式	shizuoka1				shizuoka2				shizuoka3				shizuoka4				shizuoka5						
			回答	音調	核有無	核位置	回答	音調	核有無	核位置	回答	音調	核有無	核位置	回答	音調	核有無	核位置	回答	音調	核有無	核位置			
			L	平	板	バ先	1	LLH	LLH	正	正		LHH	誤	正		LHH	誤	正		LLH	正	正		LHH
			坂下		LLLH	LHHH	誤	正		LHHH	誤	正													
			撰津	2	LLH	LLH	正	正		LLH	正	正		HLL	誤	誤		LLH	正	正		HLL	誤	誤	
			阪大	3	LLLH	LLLH	正	正		LLLH	正	正		HHHH	誤	正		HHHH	誤	正		HHHH	誤	正	
H	平	板	あかん	2	HHH	LHH	誤	正		LHL	誤	誤		HHH	正	正		HHH	正	正		HHH	正	正	
			梅田		HHH	LHH	誤	正		LHH	誤	正													
			豊中		HHHH	LHHH	誤	正		HHHH	正	正		LHHH	誤	正		LHHH	誤	正		LHHH	誤	正	
			タバコ	3	HHH	LHH	誤	正		LHL	誤	誤		LLH	誤	正		LHH	誤	正		LHL	誤	誤	
			ニワトリ		HHHH	LHHH	誤	正		LHHH	誤	正		LHHL	誤	誤		LHHH	誤	正		LHHH	誤	正	
起	伏		言社	1	LHL	HLL	誤	正	誤	LHL	正	正	正	HHH	誤	誤	誤	HLL	誤	正	誤	HLL	誤	正	誤
			再履		LHL	HLL	誤	正	誤	HHL	誤	正	正	LHL	正	正	正	HLL	誤	正	誤	HLL	誤	正	誤
			パンキョー		LHLL	HLLL	誤	正	誤	HLLL	誤	正	誤	HHLL	誤	正	正	HLLL	誤	正	誤	HLLL	誤	正	誤
			みのぼん		LHLL LLLH	LHLL	正	正		LHLL	正	正		LHLL	正	正		LHHH	誤	誤		LHLL	正	正	
			難波		HLL	HLL	正	正	正	HLL	正	正	正	HHL	誤	正	誤	HLL	正	正	正	HLL	正	正	正
			とりき		LHL	LHL	正	正	正	LHL	正	正	正												
			阪神		HLLL	HLLL	正	正	正	HLLL	正	正	正	HHLL	誤	正	誤	HLLL	正	正	正	HLLL	正	正	正
			かまへん	2	HLLL	HLLL	正	正	正	HLLL	正	正	正	HLHH	誤	正	正	HLLL	正	正	正	HLLL	正	正	正
			卒論		LHLL	LHLL	正	正	正	LHLL	正	正	正												
			関電		LHLL	HLLL	誤	正	誤	HLLL	誤	正	誤	HHLL	誤	正	正	HLLL	誤	正	誤	HLLL	誤	正	誤
			あかんで		HHHL	LHHL	誤	正	正	LHLL	誤	正	誤	HHHL	正	正	正	HHHL	正	正	正	LHLL	誤	正	誤
			足切り		LLHL	LLLH	誤	誤	誤	LLLH	誤	誤	誤	LHHH	誤	誤	誤	LLHL	正	正	正	LLHL	正	正	正
			座学		HLL	HLL	正	正	正	LHH	誤	誤	誤												
			蛍		LHL HLL	HLL	正	正		LHL	正	正		LHL	正	正		HLL	正	正		HLL	正	正	
			男		HHL HLL	LHL	誤	正		LHL	誤	正		LHL	誤	正		HLL	正	正		HLL	正	正	
			イチゴ		LHL	LHL	正	正	正	LHL	正	正	正	LHL	正	正	正	HLL	誤	正	誤	LHH	誤	誤	誤
			魂	3	HLLL	HLLL	正	正	正	HLLL	正	正	正	LHLL	誤	正	誤	HLLL	正	正	正	HLLL	正	正	正
			カマキリ		LLHL	HLLL	誤	正	誤	LHLL	誤	正	誤	LLHL	正	正	正	LLHL	正	正	正	HLLL	誤	正	誤
	雷		HHHL LLHL	LHHL	誤	正	正	LHHL	誤	正	正	LHHL	誤	正	正	LHLL	誤	正	誤	LHHL	誤	正	正		
	鈴虫		LHLL	LHLL	正	正	正	LHLL	正	正	正	LHLL	正	正	正	LHLL	正	正	正	LHLL	正	正	正		
	地下鉄		LHLL	LHLL	正	正	正	LHLL	正	正	正	LHLL	正	正	正	LHLL	正	正	正	LHLL	正	正	正		

表3. 静岡出身者を対象とした調査の結果

鹿児島	分類	大阪式	kagoshima1				kagoshima2				kagoshima3				kagoshima4				kagoshima5						
			回答	音調	核有無	核位置	回答	音調	核有無	核位置	回答	音調	核有無	核位置	回答	音調	核有無	核位置	回答	音調	核有無	核位置			
			L	平	板	バ先	1	LLH	HHH	誤	正		LLH	正	正		LHH	誤	正		HHH	誤	正		HHH
			坂下		LLLH	LHHH	誤	正		LLLH	正	正		LHHH	誤	正		LHHH	誤	正		HHHH	誤	正	
			撰津	2	LLH	LLH	正	正		LLH	正	正		LLH	正	正		HLL	誤	誤		HHH	誤	正	
			阪大	3	LLLH	HHHH	誤	正		LLHH	誤	正		HHHH	誤	正		HHHH	誤	正		HHHH	誤	正	
H	平	板	あかん	2	HHH	LHH	誤	正		LHH	誤	正		LHH	誤	正		HHH	正	正		HHH	正	正	
			梅田		HHH	LHH	誤	正		LLH	誤	正		LHH	誤	正		LHL	誤	誤		HHH	正	正	
			豊中		HHHH	HHHH	正	正		LLLH	誤	正		LHHH	誤	正		LHLL	誤	誤		HHHH	正	正	
			タバコ	3	HHH	HHH	正	正		HHH	正	正		LHH	誤	正		LHH	誤	正		HHH	正	正	
			ニワトリ		HHHH	LHHH	誤	正		LLLH	誤	正		LHHH	誤	正		HHHH	正	正		HHHH	正	正	
起	伏		言社	1	LHL	HHL	誤	正	正	HHL	誤	正	正	HLL	誤	正	誤	HLL	誤	正	誤	HHL	誤	正	正
			再履		LHL	HHL	誤	正	正	HHL	誤	正	正	HLL	誤	正	誤	HLL	誤	正	誤	HHL	誤	正	正
			パンキョー		LHLL	HLLL	誤	正	誤	HLLL	誤	正	誤	HLLL	誤	正	誤	HLLL	誤	正	誤	HLLL	誤	正	誤

みのばん		LHLL	LLLH	LHLL	正	正		HHHH	誤	誤													
難波	2	HLL	HHL	誤	正	誤	HHL	誤	正	誤	HLL	正	正	正	HLL	正	正	正	HLL	正	正	正	
とりき		LHL	LHL	正	正	正																	
阪神		HLLL	HHLL	誤	正	誤	HHLL	誤	正	誤	HLLL	正	正	正	HLLL	正	正	正	HHLL	誤	正	誤	
かまへん		HLLL	LHLL	誤	正	誤	HHLL	誤	正	誤	HLHH	誤	正	誤	HLLL	正	正	正	HLHH	誤	正	正	
卒論		LHLL	LHLL	正	正	正																	
関電		LHLL	HLLL	誤	正	誤	HHLL	誤	正	正	HLLL	誤	正	誤	HHHH	誤	誤	誤	HHHH	誤	誤	誤	
あかんで		HHHL	LHLL	誤	正	誤	LHLL	誤	正	誤	LHHL	誤	正	正	LHLL	誤	正	誤	LHLH	誤	正	誤	
足切り		LLHL	LLHH	誤	誤	誤	LLHH	誤	誤	誤	LLHH	誤	誤	誤	HHHH	誤	誤	誤	HHHH	誤	誤	誤	
座学	3	HLL	HLL	正	正	正	HLL	正	正	正	LHH	誤	誤	誤	HLL	正	正	正	HLL	正	正	正	
蛍		LHL	HLL	HLL	正	正	HLL	正	正														
男		HHL	HLL	LHL	誤	正	LHL	誤	正		LHH	誤	誤		HLL	正	正		LHL	誤	正		
イチゴ		LHL	LHL	正	正	正	LHL	正	正	正	LHH	誤	誤	誤	LHL	正	正	正	LHL	正	正	正	
魂		HLLL	HLLL	正	正	正																	
カマキリ		LLHL	LLHL	正	正	正	HLLL	誤	正	誤	LHHL	誤	正	正	LHLL	誤	正	誤	LLHL	正	正	正	
雷		HHHL	LLHL	LLHL	正	正	正	LHLL	誤	正	誤	LHHL	誤	正	正	LLHL	正	正	正	LLHL	正	正	正
鈴虫		LHLL	LLHL	誤	正	誤	LHLL	正	正	正	LHLL	正	正	正	HHLL	誤	正	誤	LHLL	正	正	正	
地下鉄		LHLL	LHLL	正	正	正	LLLH	誤	誤	誤	LHLL	正	正	正	LHLL	正	正	正	LLHL	誤	正	誤	

表 4. 鹿児島出身者を対象とした調査の結果

4. 分析

本節では、上の表 2 から 4 において得られたデータを分析することを目的とする。特に、(i) 音調パターン、(ii) アクセント核の有無、そして (iii) アクセント核の位置という 3 つの視点を軸に、この順で分析を行う。

まず、表 2 から 4 のうち、音調パターンの正答率のみをまとめた表 5 を考察することから始めよう。

音調正答率 (%)		1	2	3	4	5	平均
東京式	shutoken	33.33	36.67	40.00	36.67	36.67	36.67
	shizuoka	50.00	53.33	40.00	56.67	43.33	48.67
鹿児島式	kagoshima	43.33	40.00	33.33	50.00	50.00	43.33

表 5. 地域ごとの音調正答率

繰り返しになるが、「音調」における正答とは、回答が大阪式の音調パターンと完全に一致することを意味する。調査前の予想に大きく反して、出身地域に関わらず、音調パターンの正答率は全体的に非常に低いものとなった。また、一人の被験者が飛び抜けてうまく復元できるといったことも予測したが、それも（被験者が 15 名と少なかったためかもしれないが）なかった。最も高い被験者（shizuoka4）でも約 57% であること、また、鹿児島式を D1 に持つ被験者を東京式の被験者と比べても、大阪式（D2）の習得に優位と言えるほどの差は見られないことを表 5 において確認されたい（東京式の中で首都圏の方が静岡よりも低い原因は後で述べる）。

地域に関わらず復元率が低いことの大きな原因は、やはり、大阪式特有の H 平板と L 平板の 2 つのタイプの平板が復元できていないことにある。以下、上の表 2 から 4 と照らし合わせながら読んでいただきたいのだが、L 平板（4 例）の復元に成功したのは、首都圏出身者（5 名）の結果では、計 20 トークン中、わずか 1 トークンであり、静岡出身者の結果においても、20 トークン中

7トークンとなっている。また、首都圏と静岡のいずれにおいても、誤答であったトークンは、「摂津」の誤答 HLL を除いて、全て、H 平板で回答がなされている。

さらに、興味深いのが鹿児島である。L 平板に関して、鹿児島式の被験者の正答率は、kagoshima2 以外の 4 名では、計 16 トークン中 2 トークンとなっており、東京式被験者と同等に低い。Kubozono (2018) の指摘通り、鹿児島の若い世代はかなり東京式の影響を受けていると想像できるが、ここで、2 節でも指摘したように、鹿児島式は L 平板を持つ方言である点を思い出されたい。そうであるにも関わらず、復元できなかった 14 トークンは、全て H 平板で回答されている。例外である kagoshima2 は、L 平板の 4 トークン中 3 トークンにおいて正解している（モーラでなく、鹿児島式の音節で考えると全てに正解している）ものの、H 平板の 5 トークン中 3 トークンを L 平板で回答しており、やはり、大阪式の H 平板と L 平板の 2 つに対応しているとは言い難い。

H 平板に関しては、2 節において、東京式と大阪式の違いとして語頭のモーラが東京式では LHH のように下がることを述べた。H 平板の復元に成功したのは、首都圏では 25 トークン中、わずか 3 トークン、静岡でも、25 トークン中、4 トークンとなっている。H 平板の誤答に関しては、首都圏では 17 トークン、静岡では 19 トークンにおいて、語頭のモーラが下がった東京式 H 平板が用いられていることもわかる。

一方、鹿児島式の被験者は、H 平板の 25 トークン中 10 トークンを正解しており、東京式の被験者と比べてかなり高い正解率を示す。これは、上の表 4 で確認いただきたいのだが、鹿児島式の被験者が語頭の下がらない大阪式の H 平板を復元できているからである。もう少し詳しく述べると、上で、鹿児島式の被験者が L 平板を H 平板で置き換えるということを述べた。例えば kagoshima5 の回答を見てみると、L 平板と H 平板を合わせた都合 9 トークン中、全てにおいて、大阪式の H 平板を用いている。一方、kagoshima3 は、1 例を除いて、全てに東京式の H 平板を用いている。kagoshima2 を除いた残りの 2 人 (kagoshima1 と kagoshima4) は、大阪式 H 平板と東京式 H 平板がほぼ同数混ざる形で回答している（関西出身者からして、もし、東京式アクセントを D1 にもつ話者と鹿児島式アクセントを D1 に持つ話者で後者の方が大阪式アクセントが上手であると直感的に印象を持つ場合、それは大阪式の H 平板を用いる割合が東京式話者に比べて鹿児島式話者の方が高いことに起因する可能性があることを示唆する）。

東京式においても、例えば、コノ-サクラ-ガ（この桜が）が LH-HHH-H と発音されるように、他の語に連続する場合、H 平板は大阪式のように発音されうる (Uwano 2012 等)。つまり、実際の言語活動において、被験者である東京式話者も、大阪式の H 平板を発音したことがないわけではないはずである。それにも関わらず、文頭に生じた場合や、単独で発話した場合は、ほぼ大半の場合、最初のモーラが下がり、目的の大阪式アクセントからかなり外れた印象を与える発音となる。金田一 (1975:74) は、この語頭のモーラが下がる現象を京阪式から東京式にアクセントが通時的に変化する中で起きた「労力の節約を図る」一つの軟音化 (lenition) であると述べている。確かに、東京式において、例えばサクラは環境によって LHH とも HHH とも発音されるため、語頭が下がる現象は、音韻的に言えばアクセント核ほど重要ではないかもしれない。しかし、そうであるが故に、こと、D2 の習得という点に関しては、語頭が下がる現象は、L 平板と合わせて自然発話の中で非常に気づきにくい存在であることがデータから読み取ることができる。このことに加えて、鹿児島出身者のばらつきは東京式の習得度の差、つまり、一定数の鹿児島出身者にとって、大阪式は東京式 (D2) を介した D3 とみなす必要があることを示唆していると考えられる。

では、アクセント核の有無の問題に移ろう。下の表 6 に示されているように、平板型か起伏型のどちらか、ということになれば、その復元率は劇的に向上することが分かる。東京式話者でおよそ 86%、鹿児島出身者で 90%が正解している。Kubozono (2018) が指摘するように、D2 に対し

てはまずアクセント核の有無に耳が向いていることが裏付けられるかもしれない。そして、想像ではあるが、非関西地域出身者の大阪式アクセント習得の達成感はこのレベルで得られているのではないかと考えられる。

核有無正答率 (%)		1	2	3	4	5	平均
東京式	shutoken	80.00	86.67	83.33	66.67	86.67	80.67
	shizuoka	96.67	90.00	86.67	96.67	86.67	91.33
鹿児島式	kagoshima	96.67	93.33	86.67	83.33	90.00	90.00

表6. 地域ごとのアクセント核有無正答率

しかし、起伏型におけるアクセント核の位置に関しては、表7に示したように、正答率がかなり下がるものとなる。まず、ここでも東京式が約61%、鹿児島が約57%となっており、いずれかが大阪式の習得に優位といえる程の差は観察されないことを確認されたい。

核位置正答率 (%)		1	2	3	4	5	平均
東京式	shutoken	55.56	50.00	61.11	44.44	61.11	54.44
	shizuoka	66.67	72.22	72.22	66.67	55.56	66.67
鹿児島式	kagoshima	55.56	50.00	55.56	55.56	66.67	56.67

表7. 地域ごとのアクセント核位置正答率

その上で、地域ごとに個別に観察していくことにしよう。まず、ひとつ前の表6において、同じ東京式地域であるが、首都圏と静岡に10%ほどの正答率の差があった。これは首都圏の話者の方が起伏型を平板型として発音する割合が高いからである (e.g. 足切り LLHL→LHHH。これが、先の表5において、両地域の音調正答率の差を引き出す最大の要因になっている)。表7に戻ると、首都圏と静岡に共通するアクセント核位置の誤答の主要な原因は、アクセント核の位置を大阪式に比べて1つ前のモーラにおいてしまうことにある (e.g. イチゴ LHL→HLL (東京式ではLHH) ; 再履 LHL→HLL (東京式ではLHH))。首都圏では誤答34トークンのうち25トークンが、静岡では28トークン中19トークンがこのことに起因する間違いである。先に、京阪式から東京式へのアクセントの歴史の変遷に関して、金田一(1975:74)の軟音化 (lenition) を取り上げたが、それとは反対に、アクセント核を1つ前におく現象は、D2を真似るが故の硬音化 (fortition) が働いているものと考えられないだろうか。確かに、D1では認められていない語頭のHHやLLの連続を回避するためと見ることもできる (e.g. あかんで HHHL→LHLL)。しかし、イチゴ LHL→HLL (東京式ではLHH) のように、D1でも容認される音調パターンであっても、アクセント核を前にズラす例が多く見られることを考えれば、硬音化 (fortition) も要因であると捉えることはごく自然であると言える。この点に関しては、よりデータを充実させ、今後の課題としたい。

鹿児島出身者に関しては、まず、表7にあるように、首都圏の東京式話者と異なり、起伏型を平板型にする割合が少ない。さらに、鹿児島のアクセント位置の誤答に関しても同様にアクセントを1つ前にズラす例が、30トークン中17トークン (e.g. パンキョー LHLL→HLLL) が観察される一方で、東京式話者にほとんど観察されない、後ろに1つズラす例も13トークン観察される (e.g. 阪神 HLLL→HHLL ; 難波 HLL→HHL ; 関電 LHLL→HLLL)。この鹿児島出身者のアクセ

ント位置の前後へのズレは、音節がリズム単位になっていることが強く関与すると考えられ、東京式と同じように考えることはできないと考えられる。

最後に、分類1, 分類2, 分類3において正答率の差が生じたかどうかを考察しよう。

分類	shizuoka					shutoken					kagoshima					平均
	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5	
1	33.33	33.33	33.33	16.67	16.67	33.33	16.67	16.67	16.67	16.67	16.67	50.00	16.67	16.67	0.00	22.22
2	50.00	58.33	33.33	66.67	58.33	33.33	41.67	41.67	33.33	33.33	33.33	25.00	41.67	50.00	50.00	43.33
3	58.33	58.33	50.00	58.33	41.67	33.33	41.67	50.00	41.67	50.00	66.67	50.00	33.33	66.67	75.00	51.67

表8：語彙分類ごと（分類1, 分類2, 分類3）の音調の正答率

表8では、関西に来て初めて聞いたと考えられる分類1が最も低い数字になっている。これは、分類1が最も高い正答率になるという調査前の予想とは異なる結果であった。もちろん、分類1に割り当てられた語彙数が分類2と分類3に比べて少ないため、より正確な調査が必要であることは確かである。しかし、関西で初めて聞いた言葉だからと言って、必ずしも他の語彙とかけ離れて「正しく」大阪式を覚えられるわけでもない、ということはいえよう。

5. 結語

本論文の目的は、大阪大学への入学に伴って大阪での生活を始め、(i) 大阪式アクセントには慣れて問題なく理解できる、(ii) 大阪式アクセントを話そうと思えばある程度話せる、と自負する関西地域以外出身の大学生が、実際はどの程度大阪式アクセントを真似でき、習得できているのかに関して基礎的な調査を行うことにある。2節で議論したように、大阪式アクセントの特徴は、H平板とL平板という2つの平板アクセントを持つことにあるが、東京式をD1に持つ被験者10名と鹿児島式をD1に持つ被験者5名を対象に行った調査の結果からは、H平板とL平板を使い分けられる被験者はいなかったこと、また、音調パターンの復元率がいずれも50%に満たなかったことを指摘した。さらに、関西に来て初めて聞いたと考えられる語彙であっても、そのまま完全な大阪式が習得されるわけではないことも指摘した。

参考文献

- 服部四郎 (1951/1984) 『音声学』岩波書店, 東京.
- 平山輝男 (1960) 『全国アクセント辞典』東京堂出版, 東京.
- 金田一春彦 (1975/1995) 『日本の方言：アクセントの変遷とその実相』教育出版, 東京.
- Kubozono, Haruo (2007) “Tonal change in language contact: Evidence from Kagoshima Japanese,” *Tones and Tunes: Studies in Word and Sentence Prosody*, edited by Tomas Riad and Carlos Gussenhoven, Mouton de Gruyter, 323–351.
- Kubozono, Haruo (2012) “Varieties of pitch accent systems in Japanese,” *Lingua* 122, 1395–1414.
- Kubozono, Haruo (2018) “Bilingualism and Accent Changes in Kagoshima Japanese,” *Tonal Change and Neutralization*, edited by Haruo Kubozono and Mikio Giriko, Berlin, De Gruyter Mouton, 279–329.
- 柴田武 (1962) 「音韻」国語学会編『方言学概説』武蔵野書房, 東京, 137–161.
- Shibatani, Masayoshi (1990) *The Languages of Japan*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Uwano, Zendo (2012) “Three types of accent kernels in Japanese,” *Lingua* 122, 1415–1440.